

朱子と詞

——乾道三年の詞作を中心に——

序

古來、宋學の集大成者として有名な南宋の大儒朱熹（一一三〇—一二〇〇。以下「朱子」と稱す）は、一方で『朱文公文集』（以下『文集』と稱す）一百餘卷を今に残し、そこには約千二百首の詩が收められ、質・量ともに宋代屈指の詩人でもあった。所がその約千二百の詩の數量に對して、詞は『文集』に僅か十八首しか收められていない。「詞」は中唐期に源を發し、五代十國を経て宋代に隆盛を迎えた新しい文學型式ではあるが、北宋中期には已に士大夫を中心に、詩も詞もともに作るという詩詞並行の狀況が確立していた。この狀況は、個人差はあるものの南宋期に於いても概ね變わらない。例えば朱子と同時代の詩人として陸游（一一二五—一二〇九）は、

後 藤 淳 一

詩で今に傳わるものは九千首餘りなのに對して、詞は百四十餘首。范成大（一二二六—一二九三）は詩約千九百首に對して詞は約九十首。數量上は詩に可成り劣るが、それでもそれぞれ相當數の詞を残している⁽¹⁾。對して朱子の詞の少なさは際立っており、一考に値するテーマと言えよう。

このような問題意識を基に本稿は、理學者朱子が日常「詩」を作る傍ら、どのように「詞」を作っていたのか、朱子にとって「詞」はどのように見做され、それを作ることにどのような意義があったのか、という點に焦點を絞って初步的考察を加えんとするものである。

一 『文集』所收の朱子詞概観

朱子の『文集』は、その卷一から卷十に上述の約千二百首

中國詩文論叢 第二十七集

の「詩」を収めるが、「詞」は全十八首の内、大半の十六首が卷十の最後に纏めて収められ、残りの二首は卷五の「詩」の中に混入されている。今、試みにその内譯を、『文集』の記載に沿って書き出してみよう（便宜上、通し番號を付す）。

- 〇一「憶秦娥 雪梅「閨奉懷敬夫」其一「雲垂幕……」（卷五）
- 〇二「憶秦娥 雪梅「閨奉懷敬夫」其二「梅花發……」（同）
- 〇三「水調歌頭」「富貴有餘樂、貧賤不堪憂……」（卷十）
- 〇四「水調歌頭 次袁仲機韻」「長記與君別、丹鳳九重城……」（同）
- 〇五「滿江紅 劉知郡生朝」「秀野詩翁、念故山、十年乖隔……」（同）
- 〇六「菩薩蠻 回文」「晚紅飛盡春寒淺……」（同）
- 〇七「菩薩蠻 次圭父回文韻」「暮江寒碧榮長路……」（同）
- 〇八「念奴嬌 用傅安道和朱希真梅詞韻」「臨風一笑、問羣芳誰是、眞香純白……」（同）
- 〇九「西江月」「睡處林風瑟瑟、覺來山月團團……」（同）
- 一〇「西江月」「堂下水浮新綠、門前樹長交枝……」（同）
- 一一「鷓鴣天 江檻」「暮雨朝雲不自憐……」（同）
- 一二「鷓鴣天」「已分江湖寄此生……」（同）

- 一三「浣溪沙 次秀野餘曠韻」「壓架年來雪作堆……」（同）
- 一四「好事近」「春色欲來時、先散滿天風雪……」（同）
- 一五「水調歌頭 櫟括杜牧之齊山詩」「江水浸雲影、鴻雁欲南飛……」（同）

- 一六「南歌子 次張安國韻」「落日照樓船……」（同）
- 一七「鷓鴣天 叔懷嘗夢飛仙爲之賦此歸日以呈茂獻侍郎當發一笑」

「脫卻儒冠著羽衣……」（同）

- 一八「水調歌頭 聯句問訊羅漢同張敬夫」「雪月兩相映、水石互悲鳴……」（同）

一般に詞は、どの曲調にのせて歌ったものを示す「詞牌」を掲示して題の代わりとするが、宋代中期以降は「詞牌」の外に、どのような内容を歌ったものかを明示する「副題」をも併記するのが通例となる。但し『文集』はその通例がさほど反映されておらず、右に掲げた十八首の内、詞牌のみを掲示するものは〇三・一四、詞牌の後に副題を併記するものは〇五・一三・一六・一八のみ。詞牌を示さず副題のみを詩題の如く掲げるのが〇一・〇二・〇四・〇六・〇七・〇八・一七。その他は、〇九・一〇を「和西江月」と題し（一〇は「又」と記される）、一一・一二は「江檻詞」と題し（一二は「又」と記される）、一五は「櫟括杜牧之齊山詩作水調歌頭」

と題するが如くである。

曲調に關して言えば、「憶秦娥」「水調歌頭」「滿江紅」「菩薩蠻」「念奴嬌」「西江月」「鷓鴣天」「浣溪沙」「好事近」「南歌子」の全十調、いずれもポピュラーな曲調で、歌う者が殆どいない所謂「僻調」は一つも無い。一首の字數も、全四十二字の「浣溪沙」から全一百字の「念奴嬌」までの内に收まり、極端に長編のものはない。こうした詞牌の選擇から言え、朱子には、詞に對してその道を究めてやろうとする挑戦的な意氣込みは感じられず、ただ當時の流行に乗って座興として作ってみたという程度と見受けられる。

所で右の十八首それぞれの製作年代を考察するに、その殆どは未詳であり、副題や詠ぜられている内容から類推するしかない。例えば一三「浣溪沙」はその副題から劉韞りゅうん（一一〇一—一一七九。「秀野」と號す）の作に次韻したものと判るが、具體的な製作年代はやはり判然としない。郭齊『朱熹詩詞編年箋注』（巴蜀書社、二〇〇〇。以下『編年箋注』と稱す）では、劉韞が淳熙六年（一一七九）に卒していることから本詞の編年を「淳熙六年以前」とするに止める。⁽²⁾

こうした中で、〇一・〇二・一六・一八の四首はいずれも確かに乾道三年（一一六七）の作と擬定することが出来る。

朱子と詞（後藤）

この乾道三年は、朱子がその畏友張ちやうしよく 栻を長沙に訪れ、朱子・張栻及び朱子の門人林用中りんようちゆうとの三人で、冬十一月六日から十六日にかけて南嶽衡山の遊に赴き、その三人の間で次から次へと即興的に詩の酬答を行い、『南嶽倡酬集』と題してその一連の過程で作られた作品群を纏めた年である。つまり朱子の生涯の詞作十八首の内、その約四分の一がこの年に作られたことになる。そしてこの年に作られた詞作を一つ一つ仔細に辿って行くと、朱子の詞に對する觀念や心の中の葛藤が如實に見て取れるのである。この四首に焦點を當て、その各詞を紹介しつつ、その作られた経緯や背景等を以下に見て行きたい。

二 乾道三年の朱子詞（一）

乾道三年のこの年、朱子は秋八月に居所の福建を發ち、一月後の九月に長沙に到着、長沙に於て二箇月間、嶽麓書院にての講學に勤しむ。そしてその長沙を離れ南嶽衡山の遊に赴く直前、まず一六「南歌子 次張安國韻」が作られた。

一六 南歌子 次張安國韻 南歌子 張安國の韻に次す

落日照樓船[◎] 落日 樓船を照らす

穩過澄江一片天[◎] 穩かに過ぎる 澄江一片の天

中國詩文論叢 第二十七集

珍重使君留客意
依然（3） 珍重す 使君 客を留むるの意
依然たり

風月從今別一川
風月 今從り一川に別る

離緒悄危絃
離緒 危絃に悄たり

永夜清霜透幕氈
永夜 清霜 幕氈を透る

明日回頭江樹遠
明日 頭を回らせ江樹遠く

懷賢（3） 賢を懷はん

目斷晴空雁字連
目斷す 晴空に雁字の連なるに

この詞はその副題から「張安國」の詞に次韻したことが見て取れるが、その「張安國」とは、後世に詞人として名を知られる張孝祥（一一三一一一六九）を指す。

張孝祥、字は安國、于湖と號す。朱子よりも二歳年少。二十三歳にして第一位で進士に及第。同年の及第者には、詩人として有名な范成大や楊萬里がいる。中央政府に在った際には秦檜の意に忤（3）って一時下獄したこともある。その後この乾道三年六月に、知潭州・權荆湖南路提刑となつて長沙に赴任していた。張孝祥は以前から朱子の名望を慕っており、秋九月に初めて對面を果たすや、朱子が嶽麓書院で講學する合間を縫って張孝祥は屢々朱子を招いて俱に吟遊に赴いた。その

後朱子が長沙を發つ際、彼のために送別の宴を開き、その席上、「詞」の名手であつた彼は、朱子を送る詞を作つたのである。

南郷子 送朱元晦行張欽夫邢少連同集

南郷子 朱元晦の行くを送る 張欽夫・邢少連 同集す

江上送歸船
江上 歸船を送る

風雨排空浪拍天
風雨 空を排して 浪 天を拍つ

賴有清尊澆別恨
賴に清尊の別恨を澆ぐ有り

悽然（3） 悽然たり

寶蠟燒花看吸川
寶蠟 燒花 川を吸ふを見る

楚舞對湘絃
楚舞 湘絃に對す

暖響圍春錦帳氈
暖響 春を圍む 錦帳の氈

坐上定知無俗客
坐上 定めて知らん 俗客無く

俱賢（3） 俱に賢なるを

便是朱張與少連
便是 是れ朱・張と少連と

《于湖居士文集》卷三十三

「湘江の畔で君の乗る船を送る今宵、あいにく風雨が空を劈き、逆巻く波は天を撃つ。幸いに別れの悲しみを晴らす酒があるが、それでも別れはやはり辛い。蠟燭や燈火の燈る中、

川をも飲み干すかと疑うほど酒がぐいぐい進んでしまう。

湘江の女神が奏でる瑟^しの音に合せて、楚の舞姫達は軽やかに舞う。その暖かな響きは、毛氈^{もちせん}の帳^{とばり}を巡らしたこの春の如き宴席を覆い包む。この席に俗人はいない。いずれも賢才ばかり。それこそ朱君と張君（張拭。一の字は「欽夫」）と少連どのだ」と、名残惜しげに、そして主賓である朱子等を持ち上げるように、張孝祥は別れの歌を歌ったのである。

この宴席での即興詞に觸發されたのであろうか、普段は殆ど詞を作らなかったと見える朱子が、それに對する唱和の詞を歌ったのが上掲の一六「南歌子 次張安國韻」なのである。

朱子は、「夕日が照る中、豪華な船が、空一面を映す澄んだ川面の上を、緩やかに過ぎて行く。知事殿の引き留めんとするお氣持ちは有り難い。後ろ髪を引かれるばかり。この一面の美しい景色とこれから別れて行くこうとする我々ではあるが。

別れの悲しみは、甲高い絃の音が響くたびに、さめざめと湧いて来る。ひんやりとした氣配が毛氈の帳の内に夜通し染み渡るだろう。明朝船に乗って振り返ったならば、川邊の木々が次第に遠ざかる中、賢知事殿のことを想うだろう。晴れ渡った空を飛ぶ雁の隊列が見えなくなるまで」と、張孝祥の手厚い心配りに感謝しつつ、旅立った後の船内でのことを想像し

朱子と詞（後藤）

て、餘韻豊かに歌を締め括るのであった。

尚、張孝祥の詞が「南郷子」の曲調で歌われたのに對して、朱子の次韻詞は「南歌子」と記されているが、これは『文集』の誤記である。「南郷子」・「南歌子」にはそれぞれ複数の體があるが、【5「韻」・7「韻」・7・2「韻」・7「韻」】を前後段重ねる雙調五十六字のスタイルは、『詞律』『詞譜』ともに「南郷子」の一體として収めており、「南歌子」にこのスタイルは無い。

三 乾道三年の朱子詞（二）

張孝祥に見送られて長沙を後にした朱子一行は、十一月六日から十六日にかけて南嶽衡山を周遊し、そのさなか絶句・律詩・古詩各體の「詩」を頻繁に唱酬し合ったのだが、朱子は「詞」をも作っていた。それが一八「水調歌頭 聯句問訊羅漢同張敬夫」である。

一八 水調歌頭 聯句問訊羅漢同張敬夫

水調歌頭 聯句 羅漢に問訊す 張敬夫を同じ^{とも}にす

雪月兩相映

雪月 兩つながら相ひ映じ

水石互悲鳴[◎]

水石 互ひに悲鳴す

不知巖上枯木

知らず 巖上の枯木

中國詩文論叢 第二十七集

今夜若爲情[◎]今夜 若爲^{いかん}の情ぞ

應見塵中膠擾

應に塵中の膠擾^{かうぜう}を見て

便道山閒空曠

便ち道^{すなは}ふべし 山閒は空曠にして與麼く平生[◎]與麼^{しか}く平生を了^をへんと

與麼く平生了

與麼く平生 了はれば

天命不流行[◎]

天命は流行せず

〈熹〉

起披衣

起ちて衣を披^きて

瞻碧漢

碧漢を瞻^みれば露華清[◎]

露華 清し

寥寥千載[◎]

寥寥たる千載

此事本分明[◎]

此の事 本より分明なり

若向乾坤識易

若し乾坤に向ひて易^{えき}を識^しらば

便信行藏無間

便ち信ず 行藏^{へだ} 間^{えき}つること無く處處總圓成[◎]

處處 總べて圓成せんと

記取淵冰語

記取せよ 淵冰の語を

莫錯定盤星[◎]定盤星^{あやま}を錯^{あや}る莫かれ

〈栻〉

この詞は前段を朱子が、後段を張栻が作るという、詞では珍しい聯句の體裁を取っている。前段第九句の「天命」の部分は四部叢刊本では二字の缺字となっているが、『編年箋注』

の校勘記に據れば宋浙本では「天命」に作っているとのことであり、その「天命」の二字を補った。また後段第五句「此事本分明」には二字不足している可能性がある。『詩譜』の「水調歌頭」の條には計八體が記録されているが、正格とされている三體はいずれも九十五字のスタイルであり、他に九十七字二體、九十六字・九十四字がそれぞれ一體づつ掲げられているだけで、本詞九十三字のスタイルは見えない。先に掲げた朱子の他の「水調歌頭」はいずれも九十五字。○三・○四は後段第四・五句が【六字・五字】で構成されるのに對して、一五は【四字・七字】という違いが有るのみであり、この箇所はいずれも合計十一字となる（この【六字・五字】【四字・七字】のスタイルは『詩譜』ではいずれも正格とされている）。それ故、「寥寥千載、此事本分明」の部分に疑問を抱くことになるのである。

副題及び歌われている内容から、これは朱子一行が衡山に登り、十一月十三日に蓮花峰の下にある方廣寺に宿った際に作られたものと思われる。この方廣寺で作られた朱子の「霜月次擇之韻」詩に「蓮花峯頂雪晴るるの天／虛閣霜清くして縷烟を絶つ」とあり、「枯木次擇之韻」詩に「百年の蟠木老聲牙／偃蹇として春風にも花^{はな}くを肯ぜず」とあるのが

その傍證となろう。⁽⁵⁾ また、『編年箋注』では、この時朱子等
は方廣寺の守榮という長老が入滅したことを聞き、「夜宿方
廣聞長老守榮化去敬夫感而賦詩因次其韻」という詩を作った
が、それでも思ひは盡きず、羅漢松の枯木に問い掛ける形を
借りて、朱子等の理學の見解を吐露したものと解説する。

本詞ではまず朱子が、「降り積もった雪と月の光が互いに
照り映え、流れる川の水と岩とが互いに悲しげな音を立てて
いる。さて岩の上に立つ枯れ木よ、お前は今宵いかなる心持
ちなのか。枯れ木は下界の亂れた様を見下ろしてこう言うだ
ろう。山中はがらんとして何も無く、このような中で一生を
終えるのだ、と。だが枯れ木よ、そのように一生が終わるの
ならば、我々個々に賦與された天命というものは自由に周流
せぬではないか」と詠じた。

朱子は「空曠」たる山中に在る枯れ木を見て、『莊子』逍
遙遊篇の「今子有大樹、患其無用。何不樹之於無何有之郷、
廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下。不夭斤斧、物
無害者。無所可用、安所困苦哉」の一節に思いを馳せたので
あろう。世俗的に役に立たないことを氣に病む必要は無く、
役に立たないからこそ世俗を超越して本來の「性」を全うで
きるといふ、老莊思想の所謂「無用の用」を批判するので

朱子と詞（後藤）

ある。雪と月光、流れる水と川の中の岩とは、それぞれが孤
立して没交渉の状態に在るのではなく、互いに接觸し刺戟し
合っている。それこそが「理」の統括の下に「氣」が活潑に
運動する象徴なのであり、天が萬物個々に賦與した「天理」
の下、理氣一體の自由な周流に到るのであると訴えるのであ
る。

それを承けて張栻は、「立つて衣を羽織り、夜空の天の川
を眺めれば、露の玉が清らかに輝く。遙か千年の長きに亘っ
て、道理というものはもとよりはっきりしているもの。この
天地の間に於いて、陰陽絶えず流轉變化する『易』という働
きを見極めたのであれば、出處進退の別無く、どのような状況
に於いても圓満に成り行くのである。『戰戰兢兢、深淵に臨
むが如く、薄氷を履むが如し』という『詩經』の言葉を肝に
銘じておかなければならぬ。また、天秤の目盛りを見誤っ
てはいけない」と詠ずる。

『易經』卷七〈繫辭上傳〉に「生生之謂易」とあり、天地
の物を生んで已まない働きこそ「易」というものであると云
う。その道理を見極めたのであれば、人が出でて仕えようと
も、野に在って門を閉ざしていようと、それは變化の一過
程であって、それぞれの状況や分に應じた安息が自ずと成し

逐げられるものと、張栻は喝破する。但しどの状況に在っても慎重に行動し、道理を踏み外した行いをしないようにするべきだ、とも付け加えるのである。結句の「莫錯定盤星」は禪宗で多く用いられる言葉であり、例えば『碧巖錄』巻一に「識取鉤頭意、莫認定盤星」とある。

この聯句によって作られた詞は己が思想を吐露する一種の「哲理詞」である。詞に於いて「哲理」を説く風は北宋の蘇軾に始まると言っても良い。蘇軾は、専ら男女の戀愛の情を中心にしてたおやかな情感を詠ずる従来の婉約の詞風を潔しとせず、「雅」を追求する「詩」の傳統手法を「詞」に導入し、豪快な表現や透徹した人生觀を詞に盛り込み、後世「豪放派」と稱される一派を形成するに到った。その哲理詞の代表作が「明月幾時有」で始まる「水調歌頭 丙辰中秋歡飲達旦醉作此篇兼懷子由」であり、朱子・張栻がこの時、それまで「詩」によって唱酬を重ねて來たにも関わらず、敢えて「水調歌頭」の曲調を選んで「詞」を作り己が哲理を説いたのも、蘇軾に倣ったものと見做し得るのではなからうか。朱子は他に同じ曲調で一五「水調歌頭 櫟括杜牧之齊山詩」をも作っているが、前人の詩文を「詞」に仕立て直す所謂「櫟括體」も蘇軾に始まるものであり、杜牧の「九日齊安登高」詩を詞に

仕立てた作として蘇軾に「定風波 重陽括杜牧之詩」がある。こうして見て來ると、普段は餘り詞を作らない朱子ではあるが、いざ詞を作る際にその手本として念頭に置かれていたのは蘇軾であったと見て良い。

尙、南嶽周遊時に爲された唱酬の作は後に『南嶽倡酬集』として纏められるが、現行の『南嶽倡酬集』に右の詞は收載されていない。現行の『南嶽倡酬集』は林用中の十一代子孫、林果がその家藏の遺稿を基に再編を試みた稿本を祖本としており、朱子と張栻兩人のみで聯句が爲され、林用中がその作成に與り得なかつたこの詞は「唱酬」の内には入らない、と林果が考えたからなのであろうか。或いは林家に家藏されていた林用中の遺稿は度々兵火に遭遇したことによってその大半は散佚し、往時に比して十分の程度しか残っていなかったとのことである故、林果が再編を試みた時點で已にこの詞は散佚していたのかも知れない。

四 乾道三年の朱子詞（三）

その後、周遊を終えて衡山を下りた朱子一行は、北東に進んで十一月二十二日に櫛州（今の湖南省株洲）に至り、そこで張栻と別れ、朱子は弟子の林用中と范念德を伴って福建へ

の歸途に就き、一月かけてようやく家族の待つ崇安に歸り着く。その歸途の道中に作られたのが〇一・〇二「憶秦娥 雪梅二閨奉懷敬夫」の二首である。

〇一 憶秦娥 雪梅二閨奉懷敬夫 其一

憶秦娥 雪梅二閨 敬夫を懷ひ奉る 其の一
雲垂幕 雲幕を垂る

陰風慘淡 天花落つ

天花落つ

千林瓊玖 千林の瓊玖

一空鸞鶴 一空の鸞鶴

征車渺渺穿華薄 征車 渺渺 華薄を穿つ

路迷迷路增離索 路迷ひ路に迷ひ離索を増す

增離索 離索を増す

剡溪山水 剡溪の山水

碧湘樓閣 碧湘の樓閣

〇二 憶秦娥 雪梅二閨奉懷敬夫 其二

憶秦娥 雪梅二閨 敬夫を懷ひ奉る 其の二
梅花發 梅花 發く

朱子と詞（後藤）

寒梢掛著瑤臺月 寒梢 掛け著く 瑤臺の月

瑤臺月 瑤臺の月

和羹心事 羹を和するの心事

履霜時節 霜を履むの時節

野橋流水聲鳴咽 野橋 流水 聲 鳴咽す

行人立馬空愁絕 行人 馬を立てて 空しく愁絶す

空愁絶 空しく愁絶す

爲誰凝佇 誰が爲にか凝佇し

爲誰攀折 誰が爲にか攀折する

この二首の連作は、雪が積もる道中、白梅の林にさしかかった際、ふと張栻のことを思い起こし、友と離れ離れとなった寂しさが改めて胸に湧き起こったことを契機として作られたものである。

まず朱子はその一で、「雲がたれ込め、身の毛もよだつ寒風が吹く中、雪が舞い落ちて來た。雪が舞い落ちて、邊りの木々は輝く寶玉に變じ、空一面まるで白い鸞や鶴が舞い飛んでいるよう。はるばる進む旅の馬車は雪の中、白梅の林を通り抜けるが、邊り一面銀世界ゆえ、道は判らず道に迷ひ孤獨の思ひは募るばかり。孤獨の思ひが募った末、六朝時代に雪

中國詩文論叢 第二十七集

の中を友を訪ねた王徽之に思いを馳せ、引いては湘江の邊の樓閣にいる君（張弼）に思いを馳せるのだ」と歌う。白梅の林に雪が降りしきり、どこもかしこも白一色ゆえ道が判らなくなりかけた。その氣持の心細さが「離羣索居」即ち友を求める思いを増幅させ、引いては無二の親友張弼に思いを馳せる契機となったと、本連作作成の經緯を概括的に敍べるのである。

その下地を踏まえて其の二では、「梅の花が咲き、その梢に美しい月が掛かっている。美しい月には玉の宮殿があり、宮殿に赴いて皇帝陛下をお助けしようという君の心積もりと、危うい兆しが見え始めた當今の政治狀況が心に浮かんて来る。野邊の橋の下を流れる川は咽び泣き、旅人（私）は暫し馬を駐めて悲しみに暮れる。悲しみに暮れるのだが、さて誰のためにじっと佇み、誰のために梅の枝を折ろうとするのか」と歌う。

「和羹」は『書經』卷十〈說命下〉に「若作和羹、爾惟鹽梅」とあり、スープの味を調える際に鹽と醋（梅）を用いること。轉じて、君主を補佐して政務を調整する宰相を言う。また「履霜」は『易經』卷一〈坤〉卦に「象曰、履霜堅冰、陰始凝也。馴致其道、至堅冰也」とあり、霜を踏む時節に已

に、更に寒くなつて堅い氷となる嚴冬期のことを予期しておかなければならないと説く。また同時に、『禮記』卷二十四〈祭義〉に「霜露既降、君子履之、必有悽愴之心。非其寒之謂也」とあり、君子が霜を踏めば必ず冷ややかな哀情が湧いて来るが、それは何も氣候が寒くなったからではなく、季節の移り變わりに氣付くごとに、離れ離れとなっている肉親や親友を思い起こすからであると説く。其の二では、まず梅の枝に掛かる月から傳説上の月の宮殿を連想し、更にその宮殿及び梅から、いつかは中央政界に返り咲き、宮中の皇帝を補佐せんと企圖する張弼の心情を推し量る。更に雪降る中を行く朱子の現在の狀況から、危うい兆しが見え始めた當今の政治狀況と友を慮る心情を重層的に典故の中に溶け込ませる。そして最後に己の悲哀を風景に同化させつつ、詮方ない思いを感傷的に訴えて締め括るのである。

本連作は十八首ある朱子の詞の中でも最上の作と言っても良い。言い換えれば最も詞らしい詞である。特に其の二は絶品であろう。清、洪力行撰『朱子可聞詩集』は、本連作を評するに、「鳳逸」なる者の言を引いて次のように言う。

此の調李青蓮を絶唱と爲す。千載の詞場、嗣音爲り難し。今此の二闕を讀むに、氣渾神閒、聲情紙に滿つ。

即^{すなは}ひ擧げて以て晏同叔・秦少游の輩に示すとも、當に其の工拙を辨ずること莫^なかるべし。

古來、「憶秦娥」の詞は李白の作（簫聲咽……）が絶唱とされており、それを嗣ぐ作品は殆ど無いが、今この二首を讀めば、まさしく氣渾神閒、歌聲と情感が紙幅に滿ち溢れている。婉約派の詞人として有名な北宋の晏殊や秦觀等にこの詞を見せても、己の作とどちらが上か優劣付けがたい筈だと稱賛するのである。

所が朱子はこの連作を歌った直後、次のような詩を作り、詞との訣別を宣言するのである。

題二闕後自是不復作矣

久惡繁哇混太和^①
云何今日自吟哦^②
世閒萬事皆如此
兩葉行將用斧柯^③

二闕の後に題す 是自り復た作らず
久しく惡む 繁哇の太和を混ずるを
云何ぞ今日 自ら吟哦する

世閒萬事皆如此
兩葉行將用斧柯^③

世閒萬事 皆な此くの如し
兩葉 行ゆく將に斧柯を用ひんとす

〔文集〕卷五

朱子は、「これまで長らくみだりがわしい歌聲が心の平靜を亂すのを憎々しく思つて來た。なのに何故に今日その忌まわしい歌というものを自分から吟じてしまったのであろうか。

朱子と詞（後藤）

世閒では萬事みな、禍の芽を早く摘み取っておなかいと、將來大鉞を揮わなければならなくなってしまうものだ」と詠じ、詞を「繁哇」「鄭衛の聲」のように人を惑わすだけの淫靡で卑俗な音楽」と見做して、それを自分から作ってしまったことをひどく悔いるのである。そして詞を作ろうと考えたその氣持ちを「兩葉」（禍の芽）と見做し、禍の芽は早い内に摘み取るに限るとばかり、「自是不復作矣」（これ以降は二度と作らないことにした）と表明したのである。

かくも見事な詞を作り上げておきながら、何故に己の過ちを懼れるかの如くそれを悔やみ、詞との訣別を決斷したのであろうか。ここには朱子の詞に對する複雑な意識と心の葛藤が潜んでいると見るべきであらう。次に乾道三年當時の朱子の詩歌觀とその背景を探ってみたい。

五 乾道三年當時の朱子の詩歌觀

實は朱子はこの乾道三年當時、詞のみならず廣く詩歌を作ることに對して警戒感を抱いてた。その思いは南嶽衡山を周遊して多くの詩の唱酬を行った當時から已に芽生えていた。張栻の「南嶽唱酬序」に早くも次のような一節が見られる。
……己卯の夕「十一月十五日」、中夜凜然たるに方りて、

中國詩文論叢 第二十七集

殘火を撥して相ひ對するに、吾が三人の是の數日間亦た詩に荒^{すさ}めるを念ず。大抵事に大小美惡無く、流れて返らず、皆な以て志を喪^{うな}ふに足る。是に於て始めて要束を定めて、翼日當に止むべし。蓋し是れ後事。歌ふ可き者有りと雖ども、亦た復た詩に見さざるなり。嗟乎、是の編を覽る者、其れ亦た吾が三人の者を以て自ら傲むるか。……

〔『南軒集』卷十五〕

周遊を終えて下山する前日の夜、朱子・張栻・林用中の三人で語らいをしている際に、彼らはこの數日間に詩作に現を抜かしてしまつたことを改めて反省した。このように「詩に荒^{すさ}」んでしまつてはひいては「志を喪^{うな}」うという所まで進んでしまふ。それ故、翌日からは詩はもう作らないという取り決めをした、というのである。張栻の序に據れば旅の七日間の行程で計百四十九篇の詩を作つたとのことであり、一人平均約五十首。まさしく作詩三昧であつた。そこでもう詩を作るのは止^よそうという約束をしたのである。だが下山した後も彼らは詩を作り續けた。朱子の「南嶽遊山後記」では次のように云う。

……其の間「十一月十九日に山麓の勝業寺を發ち、十一月二十二日に櫛州に至つて張栻と分かれるまでの間」

山川林野、風煙景物、向來見る所に視^みて詩に非ざる者無し。而うして前日既に約有り。然れども亦た夫の別る日の迫れるを念じ、而うして前日講ずる所蓋し既に其の端を開きて未だ竟らざる者有り。方に且く相ひ與に思繹討論して、以て其の説を畢ふれば、則ち其の詩に於て固より暇あらざる所の者有り。丙戌「十一月二十二日」の莫、熹衆に説^いて曰く、「詩の作や、本より善からざるもの有るに非ざるなり。而れども吾人の深く懲して痛く之を絶つ所以の者は、其の流れて患を生ずるを懼るのみ。初めより亦た豈に詩に咎有らんや。然り而れども今遠別の期近づきて朝夕に在り。言に非ざれば則ち以て喻へ難きの懷を寫す無し。然らば則ち前日一時矯枉過甚の約、今亦た以て罷む可きなり」と。皆な應へて「諾」と曰ふ。既にして敬夫詩を以て贈り、吾が三人「朱子・林用中・范念德」も亦た各おの答賦して以て意を見す。熹は則ち又た進みて言ひて曰く、「前日の約已に過ぎたり。然れども其の戒懼警省の意は、則ち忘る可からざるなり。何となれば則ち、詩は本より志を言へば、則ち其の湮鬱を宣暢し、平中に優柔するに宜し。而れども其の流るるは乃ち幾んど志を喪ふに至る。羣居に

輔仁有るの益は、則ち其の義精理得、動もすれば倫慮に中るに宜し。而れども猶ほ或ひは流るるを免れず。況んや離羣索居の後、事物の變窮る無く、幾微の間、毫忽の際、其の以て耳目を營惑し心意を感移す可き者、又た將た何を以て之を禦がんや。故に前日の戒懼警省の意は、小過と曰ふと雖も、然れども亦た過に當る所なり。是に由りて之を擴充すれば、其れ過寡きに庶幾からん」と。敬夫曰く、「子の言や善し。其れ遂に之を書して、以て詔げて忘るる毋かれ」と。……『文集』卷七十七

長沙に張栻を訪れてより、朱子はしばしば張栻と道學上の討論を重ねていた。南嶽周遊時には風景に心奪われて詩ばかり詠じていたが、下山後、張栻との別れの日が刻一刻と迫るに當たり、議論の端を開いただけで決着が付いていないものが多々ある故、それにけりを付けなければならず、詩を詠じている暇など無い。かと言って山川の景はどうしても詩心を搔き立てる。そこで朱子はこう提案する。「詩を作ることは何も悪いことではないが、先日詩はもう作るまいと取り決めたのは、詩に流されて弊害を生ずることを懼れたからである。何も詩に罪が有る譯ではない。まして別れの日が目前に迫っているのだから、曰く言い難い心の中の思いは詩でな

ければ言い表せないだろう。ならば過日に爲された詩を作ってはいけないという行き過ぎた約束は、やはり撤回しようではないか」。その提案に皆が同意し、詩を作ることが再開されたのである。

朱子は更に言う。「過日の取り決めは行き過ぎではあったが、詩に流されるのを懼れ自らを戒める氣持ちは忘れてはならない。何故なら、詩は元來心の中にある己が志を敍べるものであるからには、鬱屈した思いの丈を思う存分述べたり、心を穩やかに宥めたりするには都合が良い。ただ詩を作ることに溺れてしまえば、志を失ってしまいかねない。これから友と別れ孤獨な旅を續けて行く際には、行く先々で様々なものに影響を受けて心は揺れ動くことだろう。その際には、詩を擱いて他に何によって對處したら良いであろう」。

朱子も「毛詩大序」以來の傳統的な「詩言志」説を繼承し、心の中の思いを述べるために詩はあるのだと考える。朱子が後年（淳熙四年「一二七七」）完成させた『詩集傳』の序文にも、

或るひと予に問ふこと有りて曰く、「詩は何の爲にして作るや」と。予之に應へて曰く、「人生れて靜なるは、天の性なり。物に感じて動くは、性の欲なり。夫れ既に

中國詩文論叢 第二十七集

欲有れば、則ち思無きこと能はず。既に思有れば、則ち言無きこと能はず。既に言有れば、則ち言の盡くす能はずして咨嗟咏歎の餘に發する所の者、必ず自然の音響節族有りて已むこと能はず。此詩の作る所以なり。……

とあり、それを裏付けている。しかし詩を作ることに惑溺すれば、眞つ當な心のありようが阻害されてしまうとも考えるのである。後世、清の朱玉が『文集』『朱子語類』等に散見する朱子の詩論を一篇に纏めた『清邃閣論詩』の中にも同様の所論がある。

詩を作るに間ま數句を以て懷に適はしむるは亦た妨げず。但だ多作を用ひず。蓋し便ち是れ陷溺するのみならん。……

この後、作詩への惑溺を戒める觀念が強くなり、崇安へ歸り着くまでの約一箇月の間に作られた詩には、「宿梅溪胡氏客館觀壁間題詩自警二絕」詩・「次韻伯崇自警一首」詩等（いずれも『文集』卷五）の自警詩が多く見られるようになるのである。これら崇安への歸途に作られた詩歌は、後に『東歸亂稿』と題されて一つに纏められるが、朱子の「東歸亂稿の序」では次のように總括する。

始め予擇之と敬夫に陪して南山の遊を爲し、幽を窮め勝を選び、相ひ與に詠じて之を賦す。四五日の間、凡そ

百四十餘首を得たり。既にして自ら咎めて曰く、「此亦た以て荒と爲すに足れり」と。則ち又た數を推して義を引き、更に相ひ箴戒する者久し。其の事倡酬の前後の序篇に見え、亦た已に詳かなり。……道塗次舍するに、輿馬杖屨の間、専ら講論問辨を以て事と爲す。蓋し已に詩を爲るに暇あらず。而れども閒隙の時、事に感じ物に觸れ、又た言ふ無き能はざる者有れば、則ち亦た未だ詩を以て之を發するを免れず。……然る後に崇安に至る。

始めて盡く其の藁を祛き、亂稿を撿拾し、纔かに二百餘篇を得たり。取りて之を讀めば、義理に當たり音節に中る能はずと雖も、然れども其の間に視ぶれば、則ち交規自警の詞愈いよ多しと爲す。斯も亦た吾人の朝夕見て忘れざらんと欲する所の者なり。故を以て復た毀棄せず、姑く序して之を存して、以て吾が黨の直諒多聞の益は遊談燕樂を以て廢せざる見す。其の時に或ひは一偏に發し、一に正に出づる能はざる者に至つては、亦た皆な存して削らず。庶乎はくは後日之を觀て、以て惕然として自省して改むる所以を思ふこと有らんことを。是れ則ち此の稿の存するは、亦た未だ以て益無しと爲して之を略す可からざるなり。夫の江山景物の奇、陰晴朝暮の變、

幽深傑異、千狀萬態の若きは、則ち所謂の二百篇と雖も猶ほ其の髣髴を形容する能はざる所有り。此固より得て記さずと云ふ。……⁽¹²⁾

崇安へ歸り着くまでの約一箇月の旅路は、「講論問辨」を主として學問上の議論を重ねて來た。それでもその合間にどうしても歌わなければ氣が濟まない状況に出くわした際は、やはりその都度詩を作り、朱子・林用中・范念徳の三人の作を合わせて二百篇餘りに至ったが、衡山を周遊していた間の作品群に比べれば、自警の言葉が多くを占めるようになり、過ちを能く補ったという手本として價值があらうと、朱子は振り返る。上掲「題二関後自是不復作矣」詩もその一連の自警詩の一つである。

詩の多作が惑溺に繋がり、ひいては眞正なる志のありようを失わせると懼れた當時の朱子の心情はひとまず理解できた。では上の「憶秦娥」詞は僅か二首でありながら、「詩」を多作した時以上にその作成をひどく悔やみ、あれほどの佳作を朱子が蛇蝎の如く忌み嫌ったのは何故であらうか。

『文集』や『朱子語類』等には詞に關する言及が殆ど見出せないが、やはり當時の社會通念として、メロディーにのせて歌う「詞」は元來酒席の座興から發展して來たものであり、

朱子と詞（後藤）

男女の戀愛の情を纏綿たる情感で歌う「俗」なものであったと朱子が認識していたことが、第一の要因であらう。繆鉞「宋詞與理學家——兼論朱熹詩詞」（『四川大學學報「哲社版」』、一九八九、第二期）でも次のように指摘する。

宋代では、詞は歌唱するものであったが、それを歌う者は殆ど妙齡の歌妓であり、嚴正なる理學家にとつては歌妓に接することなど堪えられるものではなかった。たとい己むを得ざる状況の下、時たま接することがあつても、「目中に妓有るも、心中に妓無し」として振る舞う必要があつたのである。⁽¹³⁾

確かに、上に挙げた「宿梅溪胡氏客館觀壁間題詩自警二絕」の其の二で朱子は次のように詠じている。

十年湖海一身輕 十年湖海一身輕
歸對黎渦却有情 歸りて黎渦に對すれば 却て情有り
世路無人欲險 世路 人欲の險に如くは無し
幾人到此誤平生 幾人か此に到りて 平生を誤まる

これは、朱子一行が湘潭の胡氏の客館に宿泊した際、その壁に胡銓（一一〇二—一一八〇）の詩が書き付けられているのを見て作つたものである。秦檜に疎まれ長らく流謫の身にあつた胡銓は、秦檜の死後、中央に歸ることを許され、その歸途、

中國詩文論叢 第二十七集

この客館に立ち寄る。その時宴會の席で黎倩という妓女を見初めて得意絶頂となり、「君恩歸るを許して此に一たび酔ふ／傍に梨頬の微渦を生ずる有り」という詩を壁に書き付けた。朱子が目にしたのはこの詩であり、妓女の愛くるしい笑窪に心を奪われたことを、士大夫たる者が得意げに詩に詠ずるとは何事だ、という口吻が右の詩に見て取れるのである。

確かに朱子にもこのような觀念があつたことは事實なのだが、しかしかの「憶秦娥」詞が詠じているのは決して男女の淫らな癡情ではなく、純粹に友を思い、その友と離れ離れとなつた悲哀の情を切なく詠じているだけであり、それは「詩」の世界では古來幾度と無く詠ぜられて來た「雅正」なる境地である。従つて當時朱子が思はず「しまった」と後悔した理由は別に求めなければならない。それはやはりその詠みぶりに求める他は無いだろう。

かの「憶秦娥」詞は上に見たように、雪の中の白梅から畏友張栻に思いを馳せることを詠じたものであるが、(1)複数の表象を重層的に典故の中に溶け込ませ、(2)己の悲哀を風景に同化させつつ、(3)詮方ない思いを感傷的に訴えるという三點に、吟詠上の特徴を見出せる。この内、前の二點は「詩」の世界でも往々にして用いられる手法ではあるが、最後の一點、

即ち極度の感傷性こそが（「詩」でも感傷的歌いぶりは多々あるものの）「詞」獨特の特徴を色濃く醸し出していると言えるのである。詞は「敘事」よりも「抒情」を生命とするものであり、その「抒情」がより深化して始めて、纏綿たる情感と不盡の味わいが生まれるのである。「專主情致」とは南宋、胡仔『苕溪漁隱叢話』卷三十三に引かれる、女流詞人李清照の秦觀詞評であるが、圖らずも朱子の「憶秦娥」詞はその秦觀の作に酷似していると後人に評された。朱子の「憶秦娥」詞がもっとも「詞」らしい詞であると評する所以でもある。

しかし、雅俗の見が先鋭化し、教養を備えた士君子としてその詩歌にも高い格調が求められるようになった宋代に於いては、同じ「感傷」でも節度有るものが良しとされ、繊細な感傷に無限定に浸るような詩歌は「軟弱」にして情に「惑溺」しているものとしか見做されないのである。朱子はそのような點に「警惕」を覺えたのであろう。『詩集傳』の序文には次のようにも記される。

……凡そ詩の所謂（いはゆる）「風」なる者は、多く里巷歌謠の作に出づ。所謂「男女相ひ與に詠歌し、各おの其の情を言ふ」者なり。惟だ「周南」・「召南」は、親しく文王の化を被りて以て德を成し、而うして人皆な以て其の

性情の正を得る有り。故に其の言に發する者、樂しみて淫に過ぎらず、哀しみて傷に及ばず。是を以て二篇のみ獨り風詩の正經爲り。⁽¹⁴⁾……

『詩經』『國風』の歌はいずれも街中の歌謠にその來源があり、歌われているのは男女の戀愛の情である。ただその中の「周南」・「召南」の二篇の作者は、文王の教化を直に受けたため「性情の正」を得ることが出来たのである。それ故、その二篇を歌う者は、心ゆくまで樂しんでも淫靡には至らず、哀しんでもひどく感傷的にはならない、と朱子は言う。男女の戀愛の情を歌う歌は太古の昔から存在したが、「性情の正」を保持していれば、「樂しみて淫に過ぎらず、哀しみて傷に及ばず」という理性的な状態でいられるのであり、それこそが歌謠の理想なのだと主張するのである。朱子にとってその「憶秦娥」詞は、「哀しみて傷に及」んでしまった失敗作であり、放っておけば惑溺へと成長する禍の種であって、早い内に摘み取らなければならない禍根であったのである。

六 結語

以上、乾道三年に朱子が四首もの詞を作った経緯とその背景を辿って來たのであるが、では朱子七十一年の生涯で十八

首しか作らなかった「詞」を、この乾道三年のみ四首も作った理由はどこにあるのであろうか。それはまず、居所を離れて長旅に出るという、日常とは異なった状況に身を置いたからであろう。見る物・聞く物すべて珍しく、その都度様々な感興が湧き起こるとなれば、自然と詩歌の数も増える。まして同行の者がいていずれも詩歌を能くするとなれば、己の感興が頂點に達していなくとも、同行者の作に觸發されてそれなりの作品に仕上がるものであろう。これは實際に自分で詩を作ってみれば實感することであるが、或る詩歌を韻字を選ぶ所から始めて全てを獨力で作り上げて行くよりは、予め韻字が決まっている次韻詩の方が遙かに作り易いものである。韻字を探す手間が省けるし、また相手の作品が恰好の参考材料となるからである。それ故、『南嶽倡酬集』に於いては七日間で百四十九首の、『東歸亂稿』に於いては約一月で二百篇餘りの「詩」が作られることになったのである。

「詞」の作に於いても似たような状況であった。恐らく朱子は當初、この旅の間に詞を作ることになろうとは思っても寄らなかったのかも知れない。その朱子を觸發したのは、「詞人」として名を知られる張孝祥の作であった。自分達を見送る詞を張孝祥が作ってくれたからには、その返答の次韻詞を

中國詩文論叢 第二十七集

作るのが禮儀であらう。

「一『文集』所收の朱子詞概観」に於いて、朱子の詞は乾道三年の四首を除いて殆どが製作年代を特定できないと述べたが、『編年箋注』では各首に出來得る限りの編年を試みており、それに據れば、例えば〇七「菩薩蠻 次圭父回文韻」は劉珪（圭父）はその字。「圭甫」とも書く）の作に次韻したものであり、その劉珪は『文集』卷二に收める「巢居之集……獨敦夫圭甫、違令……實代熹出令」詩に登場し、該詩は紹興（一一三一—一二六〇）の末年に作られたものと擬定できる故、恐らく同時期の作であらうと類推し、右の詞を紹興年間の作と擬定するのである。その説に従えば、即ち朱子は若い頃から詞作に手を染めていたことになる。但しその早期の作が「菩薩蠻」という【7・7・5・5／5・5・5】の比較的作り易い曲調であり、尙且つ回文という遊戲性の色彩が強いものであれば、朱子が詞を作るようになった動機は、友人の作を真似て座興として試みに作ってみたというあたりに在るのではなからうか。改めて朱子の他の詞を眺めてみると、次韻・唱和の作が多いことに氣付く。つまり、詞を作るようになった朱子ではあったが、自分から主體的に詞を作ること稀で、知人との付き合いの中で禮儀として返答の作を作る

に過ぎず、言わば「詞」を社交の具、士君子の最低限の嗜みと見做していたのであらう。張孝祥の作に次韻した際もそのような感覺であつた筈だ。

所が當代一流の詞の名手の作に接し、朱子の心の中に炎のような何らかの感情が燃え盛るようになったのであらう。張孝祥と別れて衡山を周遊するさなか、「詩」ではなく「詞」を作ってみようと朱子が張栻に持ち掛け、聯句という特異な手法の「水調歌頭」詞が出來上がったのである。但しそれは蘇軾に倣って兩人それぞれが現在講究している所の哲理を詞に盛り込んだに過ぎず、奇を衒ってみただけかも知れない。

一度は消えかかった朱子心中の熾火は、張栻と別れて以降、次々と胸中に鬱屈して行く惜別の念に燃え廣がり、終には「萬丈焰」となつて情念を迸らせた。恐らく朱子が初めて自分から「詞」に仕立てて歌いたいと思つて作つたのが、件の「憶秦娥」詞であつたのであらう。しかし、その二首を歌い終つた後、ほとぼりが冷め、冷靜さを取り戻してみると、己の爲した輕はずみな行爲に朱子は愕然としたのである。胡明『南宋詩人論』（臺灣學生書局、一九九〇）所收「論詩人的朱熹」では、それは「自分が感傷に陥り易く、己のために不斷に警鐘を鳴らし続けなければならないことを朱子自身深く

自覺していた」からであると云い、朱子を「濃厚なる詩人の氣質を有した道學家」であり、「道學を事業の主要な責務とする詩人と言っても構わない」と評するのである。⁽¹⁶⁾つまり朱子は詩人の心を持った道學家であり、絶えず湧き出ようとする詩心を理性の力によって何とか抑え付けているに過ぎないと言える。

正氣に戻った朱子は「もう二度と詞は作らない」という過剰な反應を示すのだが、このような訣別宣言は相手が「詞」だから爲されたものとは言えない。實は朱子は嘗て「詩」に對しても三行半を渡していたことがあったのである。『文集』卷二に収める五言古詩一首の長い詩題がふるっている。「頃ろ多言は道を害ふ以て、絶えて詩を作らず、兩日『大學』の〈誠意〉の章を讀みて感有り、至日の朝^{しつゝあした}起きて此を書して以て自ら箴す、蓋し已むを得ずして言有るならん、云ふ」と題されているのである。『編年箋注』ではこの詩を紹介三十年（一一六〇、朱子三十一歳）前後の作と擬定する。この當時、詩を頻繁に作ることは「道」を學ぶ上で害があると痛感し、二度と詩を作らないことにして、二日間『大學』の〈誠意〉の章を讀み耽っていたが、ふと感ずる所が湧いて來たので、冬至の日の朝に起きるや、詩を一首書いて戒めとするこ

とにした。前日の斷詩の禁を破ったことになるのだが、それはまあ已むに已まねず出來てしまった詩なのだから、大目に見て欲しいと朱子は言うのである。⁽¹⁶⁾詩との訣別を高らかに表明したにも関わらず、その舌の根も乾かぬ内に朱子はまたぞろ詩を作り始めたのである。何ともまあ大雑把な人である。

斷詩の禁がいとも簡単に破られたのと同様、この年に打ち立てられた斷詞の禁も後年解かれることになったらしい。例えば一七「鷓鴣天 叔懷嘗夢飛仙爲之賦此歸日以呈茂獻侍郎當發一笑」はその副題から、甘叔懷という道士が嘗て夢の中で空を飛ぶ仙人になったと聞いたので、彼の爲にこの詞を作ったが、彼が故郷に歸る日にこの詞を授け、併せて侍郎の章穎（茂獻）はその字）にも見せてやって欲しいと頼んだという事情が判る。『編年箋注』では、『文集』卷九に「詩送碧崖甘叔懷游廬阜兼簡白鹿山長吳兄唐卿及諸耆舊三首」の連作があり、その連作は複数の傍證から慶元五年（一一九五）に作られたことが判明するので、右の詞も同じ慶元五年の作であろうと擬定する。それに従えば、朱子が世を去る一年前の作となり、そのような老齡になってもユーモア溢れる詞を作り一門の者の一笑を買おうとしていたということになる。とすれば、この乾道三年に表明された詞との訣別も、時折起こる朱

中國詩文論叢 第二十七集

子特有の發作のようなものであったのかも知れない。

最後に、朱子が「憶秦娥」詞を作ったことをひどく後悔したもう一つの理由を假説として提出してみたい。三浦國雄『朱子』（人類の知的遺産19、講談社、一九七九）に據れば、この乾道三年は朱子の學說に大きな變化が訪れていた時期であつたと云う。それは、張栻との訂交が切つ掛けとなり、それまでの李侗（延平）より授けられた靜坐涵養を主とする「靜の哲學」から、心が外物と接觸して發動する瞬間に姿を現す天理の端倪を察識することこそ肝要なのだと言張栻が主張する「動の哲學」に惹き付けられて行つた時期に當るのである。

宋學では、『中庸』第一章の記述に基づいて、人の心がまだ動かぬ状態を「未發」と言い、心が外物と接觸することによって、情或いは思慮として發動した状態を「已發」と言う。北宋の周敦頤（濂溪）や二程子は未發に重點を置き、心の靜の状態を充分に養っておけば、まともな已發が保證され、外物の挑戰を受けても心の主體性は些かもたじろがないと考えた。朱子は若い頃にこの思想を傳授されたが、次第に飽き足らなくなっていた。

一方、謝良佐（上蔡）や胡宏（五峰）は已發に重點を置き、人間に本來的に備わる天理は心が外物と接觸して發動する瞬

間に姿を現すのであり、その瞬間（端倪）をはっきり認識して保持し、これを涵養して擴充して行けば心は天理によって満たされると主張し、これが湖南學派の主要思想となる。

湖南學派の張栻と思想上の討論を繰り返して行く内に、朱子はこの察識端倪の思想に傾倒して行つたと云うのである。但し心の修業を察識端倪に立つて行うのであれば、心が外物に觸れて發動する際に、その發動の仕方（情の動き方）が正であるのか邪であるのかを見極めなければならない。このような考えが當時の朱子の腦裡を占據していたとすれば、かの「憶秦娥」詞を詠じた時の心の發動は、朱子にしてみればまさしく「邪」の發動であり、「正」の發動があつて始めて爲される心の涵養にはいつまで経つても辿り着けない。そのような思想上の葛藤が朱子の腦裡に渦巻いていて、情致を主として無限定な抒情を追求する詞が、心の平靜を希求する道學とは正反對の地平上に位置することを悟り、終に「詞」を捨て去るに至つたのではないか、というのが私の少々大膽な假説である。

更に同書に據れば、二年後の乾道五年（一一六九）、朱子は突如閃き、それまでの考えの誤りに氣付いたと云う。察識から存養へと進むべきとする張栻の哲學を逆轉させ、まず未發

の存養があつてそこから已發の察識へと進むのが道理であるという朱子學の定論が確立したのである。動の哲學と靜の哲學の止揚とも稱される定論ではあるが、もし朱子をして、一度は惹かれた察識端倪說に對して疑問を抱かしめる切つ掛けとなつたのが件の「憶秦娥」詞であつたのならば、詞と道學は何やら淺からぬ因縁を有することになり、興味は盡きない。

【注】

- (1) 但し楊萬里(一一二七—一二〇六)は約四千二百首の詩に對して、詞は寥々十五首のみで、朱子よりも少ない。
- (2) 同書下冊九〇七頁。
- (3) この間の詳しい經緯については、宋元文學研究會編『朱子絕句全譯注』(汲古書院、二〇〇八)所收の205「福嚴讀張湖南舊詩」の條(同書三八五頁)を参照されたい。
- (4) この間の經緯については、拙稿『南嶽倡酬集』成書攷『中國詩文論叢』第二十四集、二〇〇五)を参照されたい。
- (5) 注(3)所掲書を参照されたい。
- (6) 同じくこの點に關しても注(4)所掲論文を参照されたい。
- (7) 「此調李青蓮爲絕唱、千載詞場、難爲嗣音矣。今讀此二闕、氣渾神閒、聲情滿紙、卽舉以示晏同叔・秦少游輩、當莫辨其工拙。」

朱子と詞(後藤)

- (8) 「……己卯之夕、中夜凜然、撥殘火相對、念吾三人是數日間、亦荒於詩矣。大抵事無大小美惡、流而不返、皆足以喪志、於是始定要束、翼日當止。蓋是後事雖有可歌者、亦不復見於詩矣。嗟乎、覽是編者、其亦以吾三人者自儆乎哉。……」
- (9) 「……其間山川林野、風煙景物、視向來所見、無非詩者、而前日既有約矣。然亦念夫別日之迫、而前日所講蓋有既開其端而未竟者、方且相與思繹討論、以畢其說、則其於詩固有所不暇者焉。丙戌之莫、烹飪於衆曰、詩之作、本非有不善也。而吾人之所以深慙而痛絕之者、懼其流而生患耳、初亦豈有咎於詩哉。然而今遠別之期近在朝夕、非言則無以寫難喻之懷。然則前日一時矯枉過甚之約、今亦可以罷矣。皆應曰諾。既而敬夫以詩贈、吾三人亦各答賦以見意。烹則又進而言曰、前日之約已過矣、然其戒懼警省之意、則不可忘也。何則、詩本言志、則宜其宣暢湮鬱、優柔平中、而其流乃幾至於喪志。羣居有輔仁之益、則宜其義精理得、動中倫慮、而猶或不免於流。況乎離羣索居之後、事物之變無窮、幾微之間、毫忽之際、其可以營惑耳目、感移心意者、又將何以禦之哉。故前日戒懼警省之意、雖曰小過、然亦所當過也。由是而擴充之、庶幾乎其寡過矣。敬夫曰、子之言善。其遂書之、以詔毋忘。……」
- (10) 「或有問於予曰、詩何爲而作也。予應之曰、人生而靜、天之性也。感於物而動、性之欲也。夫既有欲矣、則不能無思。既有思矣、則不能無言。既有言矣、則言之所不能盡而發於咨嗟咏歎之餘者、必有自然之音響節奏族而不能已焉。此詩之所以

中國詩文論叢 第二十七集

作也。……」

(11) 「作詩閒以數句適懷亦不妨。但不用多作。蓋便是陷溺爾。……」

(12) 「始、予與擇之陪敬夫爲南山之遊、窮幽選勝、相與詠而賦之。四五日間、得凡百四十餘首。既而自咎曰、此亦足以爲荒矣、則又推數引義、更相箴戒者久之。其事見於倡酬前後序篇亦已詳矣。……道塗次舍、與馬杖履之間、專以講論問辨爲事。蓋已不暇於爲詩。而閒隙之時、感事觸物、又有不能無言者、則亦未免以詩發之。……然後至於崇安。始盡祛其囊、掇拾亂稿、纔得二百餘篇。取而讀之、雖不能當義理、中音節、然視其間、則交規自警之詞愈爲多焉。斯亦吾人所欲朝夕見而不忘者、以故不復毀棄、姑序而存之、以見吾黨直諒多聞之益、不以遊談燕樂而廢。至其時或發於一偏、不能一出於正者、亦皆存而不削、庶乎後日觀之、有以惕然自省而思所以改焉。是則此稿之存、亦未可以爲無益而略之也。若夫江山景物之奇、陰晴朝暮之變、幽深傑異、千狀萬態、則雖所謂二百篇猶有所不能形容其髣髴、此固不得而記云。……」

(13) 「……詞是要歌唱的、而唱詞者大都是妙齡歌女、……嚴正的理學家是不肯見歌妓的、即便是在不得已的情況下偶爾相見、也必須是『目中有妓、心中無妓』。……」

(14) 「……凡詩之所謂風者、多出於里巷歌謠之作。所謂男女相與詠歌、各言其情者也。惟周南召南、親被文王之化以成德、而人皆有以得其性情之正。故其發於言者、樂而不過於淫、哀

而不及於傷、是以二篇獨爲風詩之正經。……」

(15) 同書一六九・一七〇頁。

(16) 注(15)の同書一六九頁に已に指摘がある。